



湘南で「暮らす」
「働く」「楽しむ」

【葉山町堀内】角田元さん

近所のビーチで拾った貝を素材に 毎週1個、愛らしい動物をつくる

写真・文／久野康宏

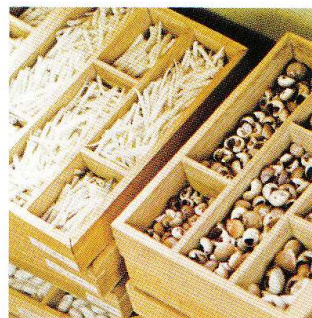


表情が感じられる貝の動物たち。貝の8割は葉山や逗子のビーチで拾ったもの。作品はホームページ「かいのどうぶつえん」(<http://zoo-shell.com/>)で見ることができる

葉山町堀内の住宅街を抜ける小道。その道はたで貝でつくられた動物が週がわりで展示されている。真っ先に見つけるのは子供たち。「あつ、変わっている！」と嬉しそうに黄色い声を挙げる。

角田元さん（62歳）が自宅の軒先で貝の動物を飾るようになったのは3年前から。140パターン以上の動物が道を行き交う人の目を楽しませてきた。

きっかけは10年ほど前のこと。自前のボートでの海釣りが趣味の角田さん。荒れて沖に船が出せない時にビーチを散歩して、何気なく貝を拾っていた。はじめは菓子箱に入れて眺めていたが、鑑賞するだけでは飽きてしまった。貝で何かをつくれないうか、と頭をひねっているうちに貝を組み合わせて顔を表現できるように気づいた。「親戚や家族に見せたら、おもしろいと反応があったんです。それで、もっと良いものを、もっと楽



集めた貝は種類と大きさに細かく仕分けて保管。こうすることで、どんな動物をつくれるか、イメージが湧きやすくなる

しいものを、と作品づくりにのめりこんでいきました」

創作の意欲は人に見せることで湧いてくると角田さん。

角田さんの作品に使われる貝は、逗子や葉山の海岸で出合ったものがほとんど。波に削られ穴が空いたり、こすれていたりと、海から打ち上がった貝の風合いを活かしているのが魅力だ。加工せず、色も塗らない。貝の色かたち、雰囲気をそのまま組み合わせることで、自然な印象を受けるのだ。

表情の愛くるしさもたまらない。生き生きとした顔がほっと気持ちるをなごませてくれる。

「表情は目が肝心。大きさや位置で表情ががらりと変わります」

はじめは市販のビーズを目のパーツとして用いていたが、ある日、スガイという貝の小さなフタにビーチで出合ったことで表情がさらに輝きを増してきた。他にもツノガイやタカラガイなどパーツ

に多用される貝も見受けられる。これらは動物のパーツにならないかという視点で、ビーチで見出した貝だ。その視点があるから、一般に人気のない割れたタカラガイも持ち帰りたくなる。

「僕らの世代では、貝を拾うなんて女性か子供の世界。最初は大きな男が拾うなんて恥ずかしい気持ち半分以上。でも最近は見境無く拾っていますね」と話す角田さんの表情が輝いて見える。

ものづくりを日常的に満喫している角田さんのもとへ、ワークショップの依頼も増えてきた。

「遊びですから、自己満足でも、とりあえずかたちになって自分が楽しめればいいんです」

角田さんの手ほどきで、貝の新たな見方を知り、しばらく遠ざかっていた近所の海に再び向かう町内の人が増えて来ている。



角田さんは貝の動物づくりワークショップを通じて、ものづくりの楽しさを伝えている。次回ワークショップは2009年2月17日と3月15日の14時から予定。会費300円。問い合わせは、NPO法人葉山まちづくり協会 tel.046-876-0421